

令和 8 年度第 2 回新居浜市地域発達支援協議会会議録

1. 日時 令和 8 年 1 0 月 8 日（木） 1 5 : 0 0 ~ 1 7 : 0 5
2. 場所 新居浜市こども発達支援センター
3. 出席者 委員 竹本幸司 秋山友紀 川井章代 明智美香 前田さやか
越智誠司 佐崎加世子 丸山律子 大谷朋美 金塚郁子
野口貴志 野沢佐絵美 濱田紀明 真鍋真理子 三木由紀子
長井郁夫（代理：岡崎） 村尾勉（代理：加藤）
アドバイザー 吉松靖文 渡部徹
事務局 秋月雄司 田中康一郎 西原勝則 宇高陽子 川上奈菜
堀口美穂 濱井真理 佐々木正子
4. 欠席者 委員 合田史宣 黒川由美 石川真悟
5. 傍聴者 なし
6. 議題 1 「地域」における発達課題のあるこどもの不登校に関する情報共有
2 その他

7. 協議結果

委員長	皆さんこんにちは。 本日はご多用の中、令和 8 年度第 2 回地域発達支援協議会に御出席いただきましてありがとうございます。 定刻が参りましたのでただいまから協議会を開催いたします。 第 1 回では所用で欠席させていただきました。委員長の中学校校長会の越智です。よろしくお願いします。 初めに、任期満了により新たに就任された委員の皆様には机上に委嘱状を置かせていただいておりますので御確認ください。 委員の出席確認ですが、本日は長井委員の代理で岡崎様、村尾委員の代理で加藤様に御出席いただいております。三木委員は遅れてこられるそうです。欠席は黒川委員、石川委員、合田委員です。 出席者が委員の過半数を超えておりますことから、新居浜市地域発達支援協議会設置要綱第 6 条第 3 項に基づき、本協議会の成立要件を満たしていることをご報告いたします。 アドバイザーには吉村先生、渡部先生に御出席をいただいております。よろしくお願いいたします。 それでは議事に移ります。 第 1 回協議会では、令和 8 年度と 9 年度のテーマを、「不登校問題を抱えた発達に課題のあるこどもへの支援」とすることとなりました。 本日はこの全体テーマのもと、発達に課題のあるこどもの不登校に関する実態把握のためのグループディスカッションを行います。 では、早速、議題 1、「地域における発達課題のあるこどもの不登校支援に関する情報共有」について事務局から進め方等、説明をお願いします。
事務局	最初に、第 1 回の協議から整理した地域の課題や不登校に関する話題を提供した後、ディスカッションのルールを説明します。 では、地域の課題や不登校に関する話題を提供いたします。 令和 8 年度第 1 回新居浜市地域発達支援協議会会議録をもとに地域の課題を整理し、課題を 6 つ抽出いたしました。 項番 1、発達支援だけでは説明できないこどもの困難が増加している。 これについては、発達障がい支援とそれ以外の支援が縦割りになっているや、こどもの困難を障がいだけで説明できなくなっているといった課題があり、今後必要な方向性としては、包括的な支援体制の構築が考えられるかと思います。

項番 2、就学前から就労までの切れ目のない支援がまだ十分ではない。
では、移行時の情報共有が十分ではない、ステージ間の接続を誰が担うのか曖昧といった課題があり、ライフステージごとではない支援体制の構築が対策として考えられます。

項番 3、保護者支援、家族支援が地域全体で不足している。
これについては、家族が疲弊してから支援に繋がる、受け皿が不足しているといった課題があり、レスパイト支援の拡大拡充や家族支援の強化が対策として考えられます。

項番 4 専門人材不足と専門性向上が喫緊の課題。
これについては、ニーズに対して専門人材が追いついていないことや技術の継承が難しいといった課題があり、人材育成システムの強化や現場支援が必要となります。

項番 5、通級インクルーシブ教育体制の再構築。
これについては、通常学級か特別支援学級かの二択の傾向があることや、多様な教育環境の不足が課題となっており、通級指導の充実、インクルーシブ教育システムの推進が対策として考えられます。

項番 6 地域連携は強いが、学校現場への還元が弱い。
では、本協議会で得られた知見が学校現場に届きにくい、不登校支援との接続が弱いといった課題があり、校内支援委員会や不登校対策特別支援教育コーディネーターなど、学校関係者へのフィードバックの仕組みづくりが対策として考えられます。

続いて、不登校の現状について簡単に説明します。
まず、新居浜市の不登校児童生徒の推移です。
小学生、中学生、いずれもコロナ禍後に急増しているのが見て取れるかと思います。

全国との比較です。児童生徒数に占める不登校児童生徒数の割合です。
国は令和 3 年度あたりから急増、令和 6 年度にはやや伸びが緩やかになっているようですが、本市は増加の勢いが止まらないように見受けられます。この傾向は小学校、中学校別でも、同じような傾向が見られるかと思います。特に、小学校において増加傾向が激しいように見られるかと思います。

令和 6 年度の国の調査結果で、不登校児童生徒にどのような事実があったかについては、多いものから順にみると、1 番は「学校に対してやる気が出ないなどの相談があった」、2 番は「生活リズムの不調に関する相談があった」、3 番は「不安抑うつ」の相談があった」、4 番は「学業の不振や頻繁な宿題の未提出が見られた」となっております。

5 番は「いじめ被害を除く友人関係をめぐる問題の情報や相談があった」であり、特に中学校で割合が高くなっております。

6 番は「親子の関わりに関する問題の情報や相談があった」ですが特に小学校で割合が高くなっており、小学校ではこれが 5 番目の事実となっております。

次に、令和 6 年 3 月に公表された文部科学省委託調査による「不登校のきっかけ要因」です。

教師、不登校児童生徒、保護者それぞれどのようなきっかけがあったかの回答割合です。

全体的に教師と子ども及び保護者の間できっかけについての認識に違いがあるように見受けられるかと思います。

特に、体調不良、不安抑うつ、居眠りや起きられないなど体の不調については差が大きいようです。

最後は、発達支援課が支援会議や教育相談で対応したときの児童生徒の主訴を

	分類したものです。 調査期間は今年の4月から9月期間中の初回の記録のみを集計しております。 相談件数81件、主訴は相談1件につき複数ある児童生徒もありましたので、件数は91件となっております。 支援会議を含んでいるため、進路や就学、支援計画や連携に関することが多かったかと思いますが、その次に、不登校や学校適用となっており、発達課題を抱えたこどもたちの不登校対策が課題の上位にあることがうかがえるかと思います。 話題提供としては以上となります。 この後のグループディスカッションでは、これらの情報も参考にいただければと思います。 それではディスカッションの進め方を説明いたします。 <ディスカッションの進め方説明> 以上で説明を終わります。よろしくお願いいたします。
委員長	説明ありがとうございました。 最後のまとめが難しいかもしれません。 進め方は、わかりでしょうか。ファシリテーターは事務局が行いますので大丈夫だと思います。 それでは16時まで有意義な時間としてください。よろしくお願いいたします。
各グループ	<グループディスカッション1:こどもの現状について情報共有>
委員長	16時過ぎたので、次に入ってもらってよろしいでしょうか。 次は16時20分で終わりますのでよろしくお願いいたします。
各グループ	<グループディスカッション2:課題及び対策について意見交換>
委員長	そろそろ時間となりましたので、区切りがよいところでディスカッションを終わってください。 意見が出ていないところもあると思いますが、今の時点で出た意見を言ってもらいたいと思います。 いるか、ぞう、ぺんぎん、きりん、の順番でお願いします。 それではいるかグループさんお願いします。
いるかグループ	いるかグループです。 こどもの現状ですが、様々出てきましたが、支援の場所や相談場所は様々あるのだけれども、親御さんや相談したい側にすると、どこに相談したらいいのか最適な場所がわからないとか、相談していても途中で中途半端になったり、行き詰まったりして、結局、振り出しに戻って、また元の相談に戻ってしまうという「進まない」ことがあるという意見がありました。 あと、話を聞くことも大事なということも出てきていましたし、学校というのはコミュニケーションをとるところ、保育園幼稚園もありますが、集団生活をきっちりしていくべきところで、初めて社会性を作る学びの場所であるということかな。 あと、親とこどももコミュニケーションが難しい。育ち方や環境によっても様々ですけど、保護者の側も、伝えることが難しい方もいらっしゃるので、コミュニケーションの仕方を大切に丁寧にしていく必要があるという現状です。 居場所も、学校だけじゃなくて地域にも様々あるけれども、問題を抱えている人達もいるので、話し合いやコミュニケーションを取っていくのが大事なという話になりました。 課題や対策ですけども、どんなお子さんであっても、受け入れる体制、不登校の子が何百人と言いますが、そんなお子さんお1人お1人を安心して迎え入れるような環境が必要だし、繋がるように粘り強く見守り続ける、諦めないということが対策ということです。

	今まで不登校について対策も続けてきていますけれど、どれが最適かというのはその子によって様々ですし、その時その時のその子に合った視点を大切にして、対策を続けていくことが必要かなと思います。 課題の中で言っていたのが、今の世の中ちょっと両極端だなという意見もありました。できる、できないとか、過保護、手放しであまり見てきていないとか、両極端で、いい塩梅というのがもっと欲しいよねということもありました。
事務局	ありがとうございました。質疑等はないですか。 いるかグループさんありがとうございました。 ではぞうグループさんお願いします。
ぞう グループ	ぞうグループです。 まずこどもの現状としましては、大きく4つにグループ分けをしました。 「こどもの様子」と、「支援連携」、「声の対応」、それから「将来」についてグループ分けをしました。 「こどもの様子」は、ゲーム、SNS、LINEで今の子どもたちは繋がっている。 一昔前は、対面で友達と約束を取り付けて会うということが常だったと思いますけれど、今はそうではなくて、オンライン上で友達と繋がっているという現状があるという話が出ました。 それから、学校生活の中で決まったことをするのが苦しいとか、友達と同じことをするというのが、ペースがそれぞれなので難しいかもしれないなという意見が出ました。 それから周りを気にしすぎるお子さんも増えているような気がするという意見も出ました。 それから柔軟に子どもたちが学校に対応するために、ある程度子どもたち自身が割り切って、何か1つ今日は楽しいことがあるからこれは頑張ろうとか、そういう割り切れるような考え方を持っている、楽しみがある方がいいのかなという意見も出ました。 それから、1つの障がいではなく、重複していたり、目に見えない精神面での障がいだったりいろいろあると思うんですけれども、障がいが多岐にわたっていて、ハローワークなどではそれをオープンにしない人もいるので、それに伴うサービスの仕方も難しいという意見が出ました。 「声の対応」ですけれども、活動の自由度を、学校やそれ以外でも自由度を上げるというのではないかなという意見が出ました。 みんなが一律に同じことをしている方が、管理する側としては一斉指導でやりやすいかもしれないのですが、その中でもある程度の柔軟性を持って取り組める方法もあるのかなあという意見が出ていました。 それから登校するきっかけでは、三、四時間目のみ来てくださとか、給食のときだけ行きましようねとか、そういうきっかけがあると登校しやすいのかなというのと、スクールソーシャルワーカーに協力していただくことで実現することもあるという意見が出ました。 それから、インクルーシブ教育はもう何年も言われてると思うんですけれども、なかなか難しいという意見も出ました。 次に「支援と連携」ですけれども、不登校は地域と連携して取り組むという意見が割と多く出ていました。 それは地域といっても幼保小の連携であるとか、それ以外の人的なものも連携して取り組んでいったらいいのかなということでした。 それから、福祉との連携も挙がりました。 それから、一人一人の特性が違うので、全体を見ながらその子を見ていくという細やかな支援も必要じゃないかなという意見が出ました。例えば学校の支援学級で、

	特性の強い子同士が関わっていた場合に、本人もちょっと嫌だなという気持ちになるかもしれないけど、それを見ている周りの子も嫌になることもあるのではないかと いう意見がありました。 支援のこどもたちによく起こる普段のいざこざについての解決方法は、大人が介入 する方が果たしていいのだろうかという意見も出ていました。ある程度こどもたち同 士で話をさせることも大事なんじゃないかなというふうな意見が出ました。 最後に「将来」ですけれども、盲学校の例が出まして、もう学校はカリキュラムの中 に将来に向けて按摩とか、そういうものも組み込まれているので、こどもたちの特性 によって、将来につなげるようなカリキュラムがあったり、支援があったりしてもいい のかなあという意見が出ました。 それから、就職活動をするときに障がい特性のマッチングが難しい場合があるとい う意見が出ました。保護者になって欲しい職業と本人になりたい職業が違う場合に は、やっぱり齟齬が生まれてくるし、障がいをオープンにしていない場合には、そ の後就職が達成されたとしても、そのあとどうなるのかなという話が出ました。 課題や対策です。 こどもの気持ちを第一に、5 つに分類しました。 学校以外の学びの場があるといいということ、学校以外の友達がいるといいという こと、本人が自立できる支援が必要だということ、それから連携の仕組みづくり、本 人と保護者と担任が連携できる仕組みづくりが大事という話が出ました。 それから、課題に対する集団での対応も難しいので、そういう対応も必要かなと思 いました。 最後に不登校といっても、こどもたちの気持ちが壊れてしまっでは、元も子もない ので、休むことも必要なんじゃないかなという意見も出ました。 以上です。
委員長	ありがとうございました。質問とかありませんか。 そしたら、ぺんぎんグループさんお願いします。
ぺんぎん グループ	ぺんぎんグループで話し合ったことです。 こどもの現状としては、見通しが持てないことの不安や傷つきやすい子が増えた。 スマホの低年齢化などで人との関わる力が弱い子や、学校が楽しくないというよう なところで、こどもの価値観がちょっと変化してきているのではないかとということと学 校の価値観のすり合わせが、今難しいのではないかとというような現状が出ました。 それとともに家庭の力、生活を整えるというところが、福祉のサポートだけではなか なかサポートしきれない現状があって、家庭や保護者との連携が難しいという現状 があります。 現状に対しての課題として、周囲の不理解や社会環境が整わないというところが合 わさっているところがあります。また、学校のことだけではなくて就職してから、学 校に行くまでは後押しだけでよかったけれども、就職すると、就職後のフォローや、 充電期間が必要であったり、そもそも職場の選択肢が少ないなど、就職、成人して からの問題も続いているというような意見が出ました。 課題解決として、周囲に理解してもらおう。 もう1 つは幼児期から成人期を見据えた視点を持つての支援や、こどもの強みを 生かす支援、認知特性を理解するなどのこども理解。家庭支援の強化、保護者が ほっとする場所や生活支援ができるサポート、相談場所の明確化などがあがりまし た。日頃からサポートが受けられていると何かしらで繋がりがやすい、相談窓口はど こに行ったらいいかわからないという保護者もいるという意見も出ました。あとは学 校家庭以外のところ、第3 の場所であるサードスペースが何かしらあればよいとい う意見が出ました。
委員長	ありがとうございました。質問ありませんか。

	いよいよ最後になります。きりんグループさんお願いします。
きりん グループ	きりんグループです。 こどもの現状ですが、特性がわかりにくく、先に繋げにづらい、そんなこどもたちが増えてきているという意見がでました。 理由として、まずそのこどもたちが家や学校、自分の好きなことを発揮できる場所がないということ、先生とこどもの思いのずれ、親は登校を急がせたいでもこどもは友達と遊びたいという思いのずれがあり、特性をわかりづらくさせている。そして、こども自身の課題として、コミュニケーションが取りづらくなってきた、遊びの中でコミュニケーションが学べない、生活リズムがこまっているなどがあり、これらの課題も合わさって、特性がわかりにくくなっているという意見がありました。これらのこどもの現状の中で、支援者は、一緒に同じゲームをするなど、こどもと同じ目線に立って支援したり、様々な相談につないでサポートしていたりしているのではないかと意見がでました。 課題と対策に関しては、ありのままでいることができないというところに、すべて集約されるのではないかと意見がでました。世の中の情報が多く、こども自身も様々なことを整理できない、学校も一生懸命に取り組んでいるもののすべて対応で来ない、地域自体も主体的に取り組みにくい、親自身も一杯一杯の状態になっているなど、どの環境においても、ありのままでいることができない現状になっているという課題があると思われます。その対策としては、まずは、連携をすること、それに加えて、地域の中に居場所が必要だという意見がでました。その居場所としては、こどもたちが自分自身を発揮できる、親が思いを伝えることができる、親自身が表現できるなどの場が必要だという意見が出ました。 そして、急がずに支援することが重要なのではないかと意見が出ました。ルーティン化して情報を整理する、生活リズムを整えるなど、教えることが必要であり、バランスを取りながら、急がず対応していく必要があるという意見が出ました。
委員長	ありがとうございました。今のグループに質問ないですか。 4つ出ましたが、活発な意見ありがとうございました。今学校ではこういうふうなことをこどもたち同士でやっていっているところですけども、この場にこどもがいてもよかったかなと思ったりもしました。 最後にアドバイザーの先生方に総評、ご指導願いたいと思います。
アドバイザー	まず新居浜市が、不登校が多いことのとらえ方についてですけど、場合によったら、ちゃんと見えるようになったという話じゃないですかね。 他所の市町には、うちは少ないですとかありませんとか言うことがあるけど、それは見えなくしているだけじゃないですか。 こどもの貧困問題と一緒に、貧困はないって言っていましたがそんなことないというのが最近わかってきた。だから、まず不登校が多いのがいけないという発想を持つこと自体が一番の問題なんじゃないかな。 その上で、問題って原因を探してもなかなか見つからないことが多いですね。また、本人の声を聞くのはもちろん当然ですけど、本人は、言えれば多分言っているんじゃないですかね。小学生でも、昔から知られていますけど、何か自分に合わない環境問題があると本当にお腹が痛くなっています。だから、私たちはこども、当事者の声に耳を傾ける、こどもと一緒に考えることがとても大切なことだと思います。 一方で、大人でも、困っている人にどうしたいですかと聞かれても、それがわかったらなあということもたくさんあると思います。 皆さん今日はいろんな情報交換をされて、その中でいろんな大切なアイデアがたくさん出てきたかなと思うんですけど。原因を必ずしも分析はできないかもしれないんだけど、いろいろあっても、今の生活に満足できているか、嫌なことあってもこ

れがあるからいいかって頑張れる。学校で勉強することって、そこじゃないですかね。

すごく経済的に困窮しているとか、家庭の状況が大変とかそういうこともだからこそ、学校に来てほっとできたりね。

ただ学校ってね、ぼうっとする場所じゃない、勉強する場所なので。勉強の中で、ちょっと自分いけてるなって思える、そういう勉強ができる、そういうときに皆さん中から出ていた勉強を含めてみんなと同じことができないといけないというプレッシャー、それが一方でダイバーシティの否定にもなっているわけですね。

ちょっと具体的な話を例にすると、宿題は、本当はやめたほうがいいと私は言っているんですけど、それでもやるんだったら、こどもが自分で決める。大人が勝手に決めない。選択肢の中からじゃあ自分はここを目標にしますとかこれをやりますという主体性、これが学年が上がれば上がるほどすごく重要。

一方で、低学年の間はなかなかそれを自分で決めるのは難しいところがあると思うんです。特に読み書き計算みたいな基礎的なリテラシーについては、できる嬉しさをどう感じてもらうか。基礎的な学びのスキル、リテラシーを効率よく獲得できるようにするというで学びの自信をつけてもらうこと。

そのときに、一律のゴールじゃない、友達と比べてじゃなくて自分の中で昨日は2の段までだったけど今日は3の段行けたとかね。他の子たちは7の段まで行けてるけどというのは関係ないです。

そういうところが結局ダイバーシティ、多様性の問題としての難しさとして皆さん中から出てきていた部分かな。そのためにも、大枠は示すというガイダンスをするけど、その中であなたはどこまでやってみたいですかという、人間、好きなことは頑張れる。

こちらのグループだったかな、「好きな予定は変更大丈夫だけど、嫌いな予定は変更が難しい」というのは当たり前ですね。私たちもそうでしょ。

私は、それ自閉だからとかいうふうに、ある特定の障がい特性という見方でとらえないほうがいいんじゃないかなと思うんです。

ただそこにすごく繊細に気にできる人たちと、あまり深く考えずに流せる人がいる。その中に障がい特性の関連もあります、そういう見方で、これも皆さんの中から出てきていた「一人一人を理解する」。でも、理解するだけじゃなくて、理解することで、その子その子が自分で自分を生かせるようにする。そういうことを、今の学校で、今のこの子で、1つでいいから確実につくっていく。

そういう点では、不登校で少しでもいいから学校に来てね、そうしたら出席にするよ、というのはおかしいです。出席のための学校じゃないです。

この問題は何かというと、「本当は全部いいといけないのに、君はしょうがないから、ちょっとだけで許してやるよ」という視点になっていませんかということです。

「君が少しでも学校に、居場所を感じるだけでなくやりがいを感じるために、それは君だけでなくみんなそうなんだけど、でも君を通してそれを考えたいんだよね」というスタンスで、学校に行きづらくなっている、学校に行く価値を感じにくくなっていることも一緒に考える。

あと保護者の問題は、結局、社会不安の問題がすごく大きいと思います。

大人がハッピーに暮らしていないとこどももハッピーに前向きに考えられません。

ただこれは学校の問題、教育の問題ではなくて社会福祉の問題なので、これはしっかり社会福祉の方でやってもらって、学校としては、そういう中で、おうちでもハッピーにこどもが家庭学習することが大事なので、どうやったら親子関係も悪くならない、学力も深まるし親子関係も深まるような家庭学習ということも一緒に考えさせてくださいという。それで宿題を出すんだったら私はいいと思っています。

あとやっぱり幼児期からがすごく大事です。

	乳幼児期は遊びと生活を通して学びの基礎を作っておかないといけない。この中にコミュニケーションの基礎も入ります。 そういう点で私が危惧しているのは、幼児期から大人と同じようなことを早くさせないといけないという大人たちの焦りです。 これはむしろ学力と学習意欲を低下させてしまいます。 ですので、本当の意味で必要な学びに繋がる遊びや生活とは何かというところから保育の現場ではぜひ考えて。 学びに繋がる遊びとか、生活。この間ある幼稚園に行ったら面白い積み木があったんですけど、この積み木は何と因数分解の積み木になっている。 私たちの生活や遊びの中には、実は教科の要素がいっぱい入っているんです。その体験が足りていないこどもはただの記憶ゲームになるので、応用力にも繋がらない、確かな学力に繋がらない、その場限りになります。 そういったところも含めながら考えて、こどもの学びというのを小さい頃から一緒に考えたいですね。 そのために、新居浜市として幼児期にはどんな学びの基礎を、こどもと一緒にやっていきますか。それを受けて、学校に上がったときにどういう学びを、こどもがしっかり学びがいのある学びたいものとして、積み上げられますか。そこら辺の整理もされていくことが大事。 あと保護者がどこに行っているかわからないのは、園や学校の先生たちが、まずは専門機関にどんどん出かけていって相談するところからスタートして、誰かが先にちょっと道を付けといてくれると行きやすいと思います。 探さないといけないからこそ情報提供をしっかりやるという考え方も大事ですが、自分探せなくても繋がる仕組みということも考えられるといいと思います。 第3の居場所も全国的に注目されていますね。とても大事なことだと思います。 ただ、第3の居場所、今日この後飲み行こうかなと思っている方もいるんじゃないかと思いますが、第3の居場所は大事ですがあくまでも第3なんです。 こどもによっては第3の居場所が第2の居場所になっている。でもそれをそうせざるをえない。こどもたちが、学校に安全安心がない場合にはそうなります。これは学級経営が実はすごく関係します。 先生がこどもとどういうふうに関係を作っているか、こどもたち一人一人に「君のこういうところってすてきだね、面白いね。」というふうにポジティブに見ているかどうかという問題がすごく大きいです。 人は自分が見られているように人を見るようにするし、自分がされたように人にするので、そういったところで、生徒指導の観点も、学校の先生方それぞれで考えていただいた上で、第3の居場所がちゃんと第3の居場所であられるようにしていただけたらなと思います。
アドバイザー	5つの話ができればいいなと思います。 今日の話は幼稚園、保育所の先生が参加して、幼稚園、保育所の現状を言っていたらわかることがいっぱいあったんじゃないかと思っています。というのが、巡回したら不登園の声もすごく増えているんです。 幼稚園、保育所の段階で、この子は小学校に行ったら不登校になるなと思ったら大抵なっています。 それで1つ目が、認知面ですが、一緒にまねる、覚えるという横の概念が今ないんじゃないか。 家族や友だちの真似をして生活習慣ができ上がりますね。覚えておいて思い出して活用するなぞなぞとか、神経衰弱とか、そういうことをする習慣があつて1年生になっていたけど、それができなくなっている理由は何かという、テレビ、電話の問題であると思うんです。

昔は近所にテレビや電話があつて、呼びに来てもらう。昭和時代はそんなだった。今は個人の部屋だけじゃなくて、テレビを持ち歩くことができるじゃないですか。電話も持ち歩くでしょ。だからもう個人個人になっているから一緒にという概念を作るのがものすごく難しい時代なんですよ。

こうやって協働でするのが地域の共生社会。家族の協働が当たり前。

それがもう、個人個人になって自由になっている。社会がそう変わっていつているのに、学校は何ら変わらないんです。今のこどもたちの様子に合やす学校を作らないといけないというのが1つ目。

2つ目が安心の居場所。

昔は家庭が安心の居場所だったんです。幼稚園、小学校になったら公園なんかで遊びあつて、疲れ果てて家に帰ったらほっとする安心安全という居場所、基地みたいなのがあつたんです。

今どうなっているかといったら、安心安全の居場所を持ち歩く時代になっていませんか。

小学校1年生なんかで、ペットボトルぐらいの人形を2つ3つ全部ぶら下げて行っている子とか、授業を見に行ったら1年生2年生でペットボトルぐらいの大きさの人形を机の上にポンと置いて、それ触りながらだったら通学、勉強できる子だとか。5年生ぐらいから中学生になったら人形みたいな筆箱が入っているんです。中学校でも半分ぐらいの子がやりますね。

それで、児童数700人ぐらいの学校で禁止すると、何が起きたかという和不登校が50人に増えた。

だから安心安全は家にあつて、外で頑張つてしんどくなったら家に帰って安心安全でほっとするという文化じゃなくて、今はその場その場で安心安全を持ち歩いて安心安全に過ごしている。

その場で困ったら、どこに行ったら安心安全の居場所があるんでしょうかね。

日本で居場所、居場所、と言っているけれど、昔の概念と違ってきているんじゃないかな。持ち歩く時代。

3つ目は、最近自律神経の研究がよく進んでいるんですが、僕が関わっている不登校の子のほとんどが、自分は学校に行きたいんだけど、体が自分の思い通りに反応しない。それで、嫌だなあと思う子は我慢せんといかんと思うんだけど、身体を自分でコントロールできない。自分が自分の思い通りにならないと言って一番悩んでいるんですよ。

だから、本人が一番行きたいんだけど、自分の思い通りに自分が操作できないと悩んでいるこどもたちの応援をしないといけないんですよ。

お前が悪いお前が悪いと言うのでは、それはもう自分でわかっているんだから、どうやったら自分で自分の体や心を文字にするかというのを教えてくださいと言う訴えが多いと思っています。

四つ目、共通の体験というのがない。

今の不登校適応教室だとかで指導されている内容を見たら、昭和時代の子がお宮の境内で遊んでいた内容ばかりなんです。気持ちが通じてほっとするみたいなのを、適応教室なんかでプログラムでやっているんじゃないかなという印象です。

例えば家庭だったらトイレが1つですよ。お父さんが入っていたら、お父さんが出るまで待たないといけないでしょ。だから家族の中で阿吽の呼吸で譲り合うことがベースになって、集団の中でどうするかということをしていたけれど、今は、家庭でもトイレが2つあるなど、困ることがもうほとんどないということになっているので、一緒に助け合うということができていないのではないかな。

幼稚園や小学校のこどもたちが放課後や休みの日にお宮の境内なんかで遊んで

	いたような遊びが今取り上げられて、インターネットや映像の文化だけになっているから、体験で覚えられない。それをトレーニングしているのが適応教室じゃないかなという印象で、応援の内容はなにかというと、不登校の子、それから発達障がいの子の、周りの子を育てることをしないといけないんじゃないかな。 新聞で出たからご存じだと思うんですけど、普通の不登校の子よりも発達障がいの子は3倍多いというのがありますよね。 だから、認知面の問題も随分影響していると思うのですが、本人をどうするかではなくて、本人を安心安全で受け入れるクラスの雰囲気が要るんじゃないかなと思っています。巡回で教室に入ったら、この教室大丈夫だなとか、ここだったらもう繰り返さないとかいうのを僕は感じるんですね。こどもたちもそれを感じているんじゃないかなと思っています。 相談などでも、親子だったり家庭だったり、感覚でいろいろ感じるというレベルの応援の仕方なんじゃないかなと思っています。 再度お願いですが、お母さんの安心安全の居場所を作ってくださいませんか。 こどもの安心安全を作りましょうって家庭においてお願いしているんですが、その家庭のお母さんを考えてみてください。 土日に学校に行っている子がいて、兄弟が1日ずつという。そういう学校に行っている子と行っていない子の兄弟を抱えて、お母さんは仕事が土日休みで安心安全の家族の雰囲気を作れというのは、僕は無理だろうと思うんですよ。 だから不登校のこどもの応援よりも、お父さんお母さんが安心できるような地域の何か文化なり、家族がガス抜きできるような、そこを今日のメンバーの方に協力していただいたらうれしく思います。 この5つのことをやってもらった上で、今日協議されたような内容を重ねていただいたらありがたいなと思っています。
委員長	ありがとうございました。 今日皆さんとともに共有した情報とか、お2人のアドバイザーからいただいたご助言をもとに、今後さらに協議を進めていけたらと思っています。 では議題2、その他に移りますが、皆さんからこの場で何か伝えておきたいこととかありますか。 特にないようなのでこれで本日の協議を終了いたしたいと思います。 次回は第3回3月11日木曜日15時からの開催を予定しています。 よろしくお願いいたします。 今日は本当にありがとうございました。